



捜査 の 『虜』

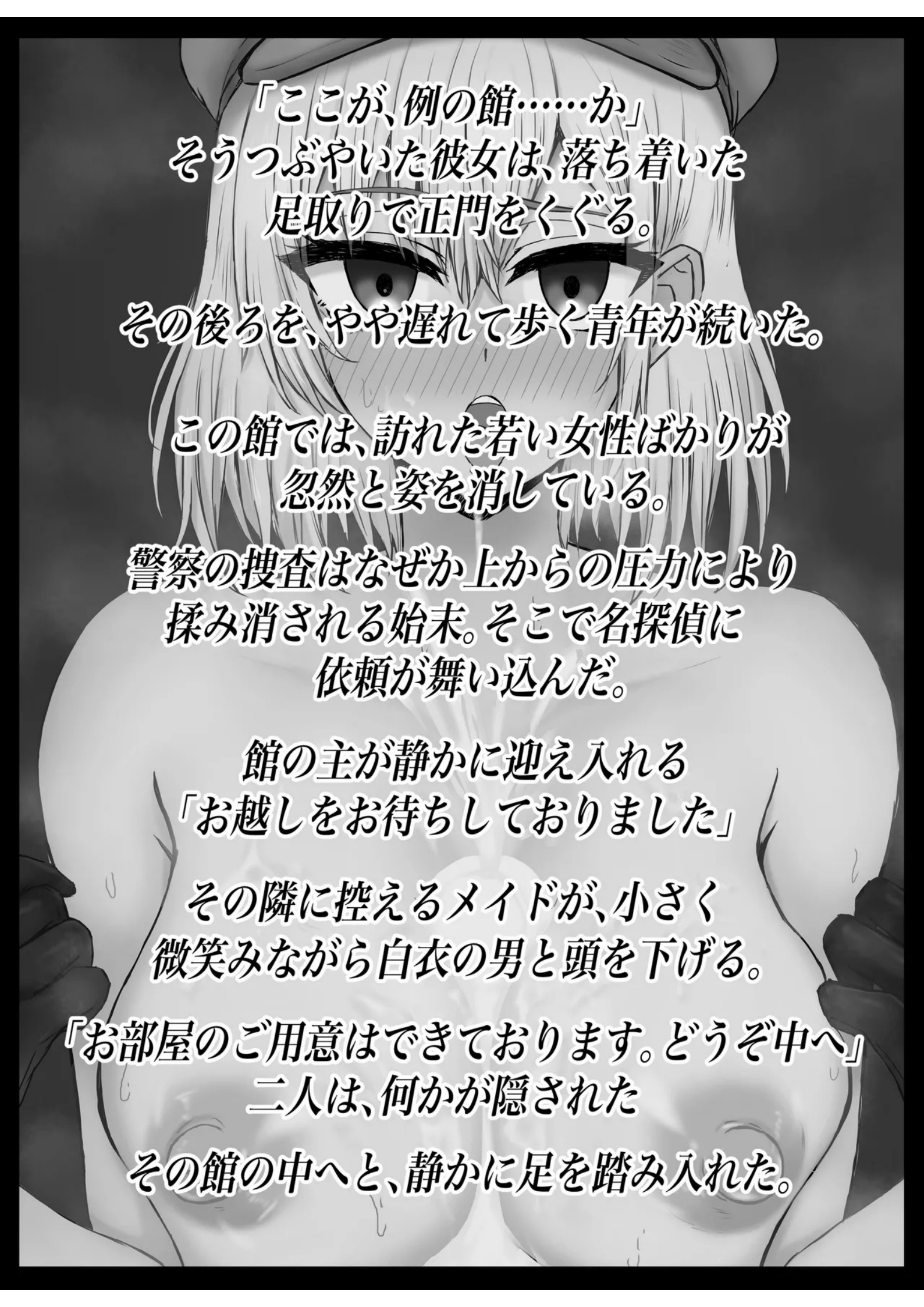
口探偵 は

たひた荘

— 成人向け —
R18
ADULT ONLY
18歳未満
購入・閲覧禁止

名探偵は 捜査の虜

洋館で起きた連続失踪事件
に挑む名探偵シリーズ



「ここが、例の館……か」
そうつぶやいた彼女は、落ち着いた
足取りで正門をくぐる。

その後ろを、やや遅れて歩く青年が続いた。

この館では、訪れた若い女性ばかりが
忽然と姿を消している。

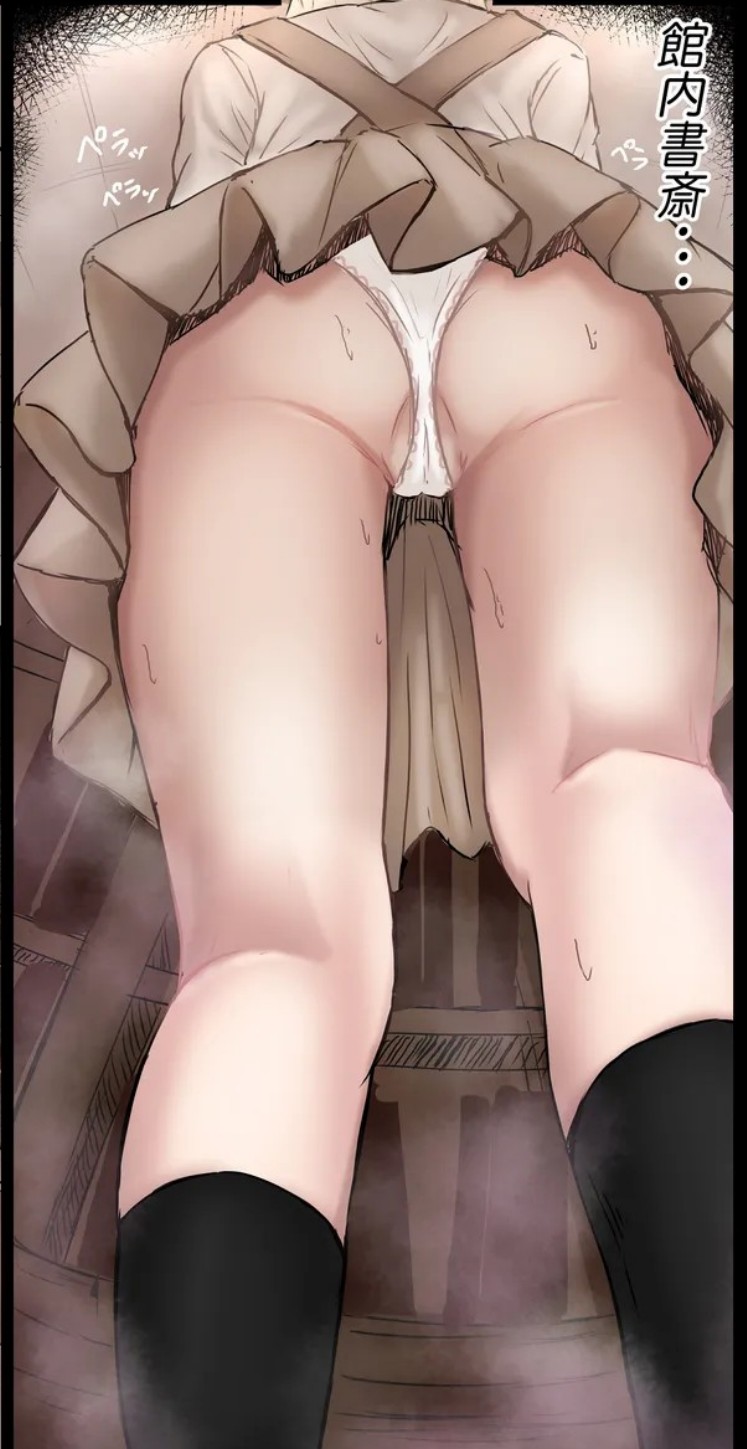
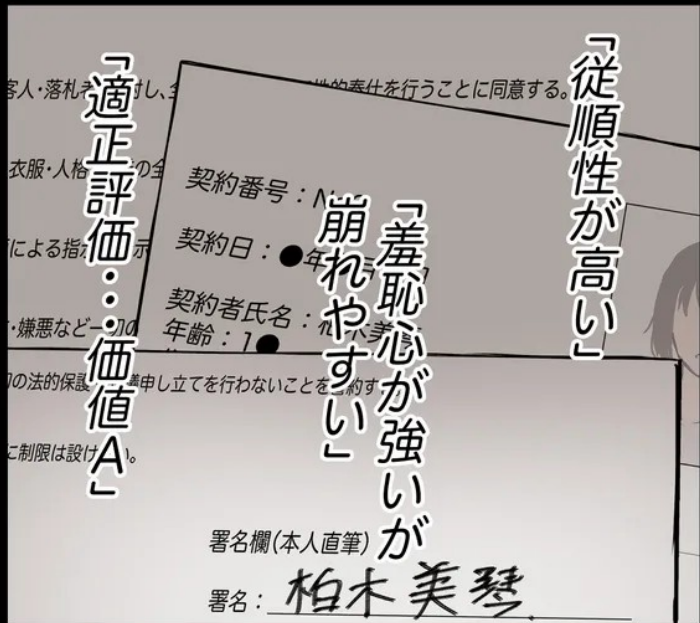
警察の捜査はなぜか上からの圧力により
揉み消される始末。そこで名探偵に
依頼が舞い込んだ。

館の主が静かに迎え入れる
「お越しをお待ちしておりました」

その隣に控えるメイドが、小さく
微笑みながら白衣の男と頭を下げる。

「お部屋のご用意はできております。どうぞ中へ」
二人は、何かが隠された

その館の中へと、静かに足を踏み入れた。





流石に
怪しいな...

一旦持ち帰って
助手君と打ち合わせ
するか...

スカー

んん

なっ...

“ぶすっ……”

“グ”

この注射は名探偵様に
リラックスしてもらう様、
特別にご用意しました。

休んで一度頭を
整理しましょう。

なかなか熱心に
調べているようすな

いかがでしょう
名探偵様、ここで
一旦休憩してみても

これからが本当の
捜査のはじまりです









何だかわからないけど
この館にこれ以上
居るのはまずいっ
だめだっ...考えが
まとまらないっ

おおおつやばっ
これ指止まないっ
早く助手君に会って
伝えないとっ

あつすいませんっ
こぼしてしまい
ましたっ
お拭きしますね
動かないで

そんなそんなっ
ご遠慮なさらずにっ

あれ？
なんだか少し
硬くなつて
きたような？

えいっ

照れてる
助手さん
かわいいっ





なるほど...

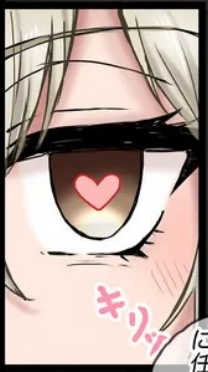
犯行に使われたと思わしき証拠品が見つかったと...

そこで私の
おまんこ捜査
が必要なんです

確かに手がかりになるか...

ご協力ありがとうございます。
? ?

私の頭脳とおまんこ
に任せてください。
? ?



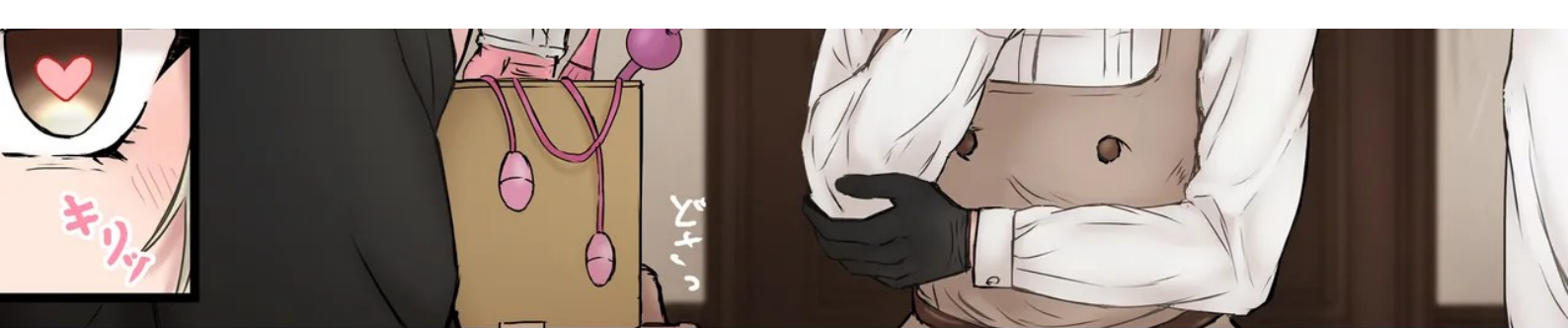
流石に暗示が
解けかかっているので

重ねがけして
おきますね。

おや、もう意識が
ない様子かな...

まあまだ玩具
はありますので

じっくり考えて
推理してください





一応名探偵さんにも
報告しておくか...

でもまだいつけ中だし
会ったのはもう少し
待っていてください!

わ! 助手さん
よくお気づきに!
そうなんです!
最近飼いはじめ
たんです!

メイドさん、
この館では犬を
飼ってたりしますか?
夜に鳴き声? を
聞きまして...



それでは名探偵さん
今日のわんわん捜査
の時間ですよ。

匂いを手掛かりに
犯人(ご主人様)を
見つけに行きましょう。

今日も情けなくて
良い子良い子

ぐわ... ぐわ...

た... ち...

ぐわ...

ぐわ...

このティッシュの匂いをしっかりと覚えましょう

この匂いが犯人の手掛かりになりますよ

おや、名探偵さんこれが匂いの元なんですか？

すいません、ご主人捜査にご協力お願いします。

ほらっしつかり啜えて舐めて味を覚えましょう

もう忘れられないあなたの好物になりますよ

昼の部

名探偵様、今回も
捜査お疲れ様です。
それでは
いつもの一杯ご用意します。
しばしお待ちください。



おや、我慢出来ませんでしたか。
(暗示は順調みたいだな)
そんなに焦らなくても
おかわりもあるので
安心してください。



夜の部

名探偵様

今日も捜査が
順調でなによりです。

今日も捜査が
順調でなによりです。

お好きになられ
ましたかな？

だいぶ自然と吸い付く
ようになりましたね

良い子良い子
ですね



数日後

ここっ……♡

ここから現場に残された精液と同じ匂いがします♡♡

あゝ♡♡♡♡♡
キ……くっ♡♡

今すぐ調べないと
いけません！♡

捜査にご協力
お願いします♡♡

スッ

スッ

レロッ

レロッ

ペロッ

ペロッ

はー♡

おっ♡

おっ♡

フー♡

フー♡

フー♡

フー♡

フー♡

フー♡

フー♡

フー♡

フー♡

フー♡

フー♡

フー♡

フー♡

フー♡

フー♡

フー♡

フー♡

フー♡

あーまだ暗示の効果
残ってましたか

いけませんよ
夜まで待つて
いただかないと



あゝもうかなりおちんぽへの
執着が溜まってる頃合いですねゝ
誤認はそのままですしに
捜査の記憶を思い出して
もらいますようか。



今からその証拠
を見せてやる！

じっとして
いろ！

ビッパッ

諦める！
お前のやった事
は全て判明した！



そつだ...！

犯人はこの
おちんぽだっ！

私のおまんこで
捕らえて見せる！

勝負だっ！

この開発された
体がその証拠！

正正
マジマッ

正正
ザ探偵









契約書

メイドさん、やり方は
これで合ってるかな...?

名探偵さん
その調子です

助手さんも
硬くなつて
喜んでますよ

ぐんぐん

はーん

はーん

はーん

はーん

はーん

はーん

はーん

はーん

ギュー

もみ

もみ

もみ

もみ

もみ

もみ

もみ

誤認捜査中

以上で聞き取り
は終わります、

お役に立てたら
嬉しいです、

私達も早く犯人が
捕まる事を
願っていますから、

お前の所にも
聞き取りに来たの？

よせ、

あまり聞かせると
勘付かれるぞ

平気
だって

休憩中は完全な
暗示状態だってよ

使用は休憩中限定だけど
労ってくれる
ご主人には感謝だよな。



ご協力
感謝します

ぞくぞく

おっ
はー
んー

はー
んー

ぞくぞく

びび

ガク

パン
パン
パン

ドパン
ドパン
ドパン

ズキ

ドパン
ドパン
ドパン

ぞくぞく

『ゲスト寄稿』



Guest

埼玉ゆかり

鳴らされたベルの音が耳に吸収された途端、身体が熱を帯びる。
無意識のうちに自身の身体を押さえつけるように抱きしめた。

「どうしたのかね？随分と震えているじゃあないか」

男の手が肩に寄せられただけで身体が跳ねる。自分のものではないかのように。

「なに、を……」

よろけるように距離を取ると、男は髭の間からいやらしい笑みを浮かべる。

「何を、か。もはや自分では考える余裕もないかね？」

息が荒く呼吸が浅くなる。

まさか私がベルの音を聞いただけでこのような状態に？

館の主人の言っていることが、どうしてか頭に染み入ってくる

……。

「覚えていないのも無理はない。記憶から消えてしまうのだからね。
だが今日の分の捜査はしっかりやってもらうよ」

再びベルの音が響く。

ぐちゅり。

ぬるぬるとした感触が脚をつたう。とろとろとした液があふれて
下着を濡らす。隠すようにへたり込み股を押さえた。

「なんで……？」

「いやはや、ドクターの媚薬は名探偵様と相性抜群だな」

物陰から現れた男の手にはあやしげな薬が。

「この薬を調合するのみなかなか骨が折れましたからね。どうです
？またほしくなってきたんじゃないませんか？」

目の前に揺らされた薬に目が離せなくなり、本能で欲するように
喘ぐように口を開けてしまう。まさしく犬のように……。

「いい反応をしてくれますね。医者冥利に尽きますよ」

求めてはいけないとわかつてはいるのに欲しがらずにはいられない。
ドクターの手から私の口へ落される寸前、男がそれを制止する。

「そうやすやすと与えてはならんよ。立場というものを今一度わから
せなければね。さて、名探偵様。この薬が欲しいのならば何をす
ればよいのか、お得意の推理で解いてみたまえ」

推理開始、と言わんばかりに鳴らされたベルが響いたころ身体だ
けでなく本能的に思い出す。私はただただ薬を欲し、だらだらと溢
すしかないこの下腹部に栓を求めるしかないということに。

仰向けに転がり、服従のポーズをとる。

「お、お願いしますっ……。薬を私にお薬をください……！」

「はっはっはっ、呂律も回ってないじゃないか……！ふっ、ドクタ
ー、あげてくれ」

薬が口内に広がり体内に浸透していくのが感じられる。ゾクゾク
と身体が震え、それはやがて下腹部へと続く。もはや下着の意味を
なさない。びしょ濡れのそれに本能的に手が伸び、下着の上から乱
暴に、しかし適当に手を動かす。

「んっ、くっあ……。はあ、っああ……」

水音と嬌声が室内に響き渡り、それがまた自分自身を欲情させる。

「ああっ、あっ、っはあ……。んっ」

二人に視られているのも忘れ、下着の隙間から手を入れふやけた
秘部に触れる。下着越しとは数段違う刺激に腰が引けた。どんだん

と近づいてくる感じたことのない絶頂の度合いに手を大陰唇へ逃がした。

少しでも刺激を逃がそうと二本の指で入り口を閉じるように抑え込む。

ぶちゅ。愛液があふれ、それはとどまることを知らない。

ぐちゅり。右手がぬるぬるとまみれる。

大陰唇からおそろおそろクリトリスへ。

「つつ……!!」

直接的な刺激に息をのむ。自身を完全に理解している右手が的確に弱点をいじくりまわす。愛液と相まってぐちゅぐちゅと視覚的にも気持ちよさそうになった陰部を責め立てる。

今すぐにでも果ててしまいたいそうになる中、少しでもこの快感に溺れていたいと再び大陰唇へと。そしてぬるぬるとした右手をクリトリスへ。

さんざんお預けをくらった陰部を絶頂へ導く。

硬くなったクリトリスの根元をぐりぐりと指で転がし、つまみ上げスパートをかける。

「んっあ、っあ、つつあん、あっ……。ああっ、……いつ……え？」

果てる寸前、男に腕をつかまれる。

「おいおい、何を勝手にイこうとしているんだ？私がいつ許可を出した？」

「さすが、手厳しいですね。確かにお楽しみはここからですよ？名探偵様？」

男のズボンがはち切れんばかりに膨らんでいる。ズボン越しにも伝わる雄のフェロモンに釣られるように四つん這いで近づく。

「ご、ごめんなさいっ、いつ、イかせてくださいっ!!」

男の股間にほおずりさせながら懇願する。もはや正気などは微塵もなく、今や頭にあるのは快楽を求める行動のみ。

「ふん……いいだろう。では、わかるね？」

「……は、い」

這った姿勢のまま口だけでチャックを下す。濃い匂いを吸い込むとクラクラが止まらない。下着も口先でおろすと、目の前で大きく反りあがったそれが私の視線をくぎ付けにする。

「ふん、見えているだけでいいのかね？」

あわてて陰部にほおずりをし、顔いっぱいにおいをこすり付ける。さらに、尿道の先を鼻に押し当て大きく吸い込み、肺の中を満たす。満たされた多幸福感に身体が身震いする。

「ん、はあっ……」

舌先を亀頭のカリの部分にそわせ、チロチロと舐めまわす。おいしくなんてないはずなのに、脳が勝手に「おいしい、おいしい」と繰り返し信号を出す。

思い切って喉の奥まで息が出来なくなるほどぐわえ込むと、いじってもいないのにイキそうになる。

「ん、ぶうつ、ん……!ぐひゅっ、かはっ」

髪をつかまれ、おちんちんから離れさせられる。喘ぐように空気を吸い込む。苦しいはずだが、このままおちんちんがどこかに行ってしまうのではないかと不安になり、再びぐわえ込む。

「じゅるる、んぼっ、れる、はあぁ……。んくっ、んあっ、じゅっぶ、じゅぼっ」

自分の唾液とおちんぼの液が混ざり合っていやらしい音をたてる。垂れる液が落ちないようにこくこくと喉を鳴らして大切に飲み干す。おまんこをいじり倒したい気持ちを抑え、おちんちんをしゃぶることだけを考える。

おちんちん……。おちんちん……。おちんちん……。おちんちん……。

「……せ。……い、なせ……。離せ！」

おちんちんに夢中になっていると、突き飛ばされ、またも引き離される。

「あっ……」

切なさがあふれ、四つん這いのままおちんちんを追いかける。

「まったく、こらえ性のない雌犬だ……。まだまだしつけてやらんとダメだな」

顔を足裏で押さえつけられながらも視線だけはおちんちんから離さない。よだれでべちょべちょになってしまったおちんちんだが、ぬるぬろとした照りに相乗的に魅力が増している。

「しかし、ここまで奉仕できたのなら褒美をやってもいいかもな……。そら、ケツを向ける」

「よろしいんですか……!」

いそいそとおちんちんにお尻を向け、ふりふりとおまんこを差し出す。立ったままでは少しばかりおちんちんに届かない。

「どうした？ 欲しくないのか？ しまったっていいんだぞ？」

おちんちんを私のお尻にべちべちと当ててくれる。更には、おまんこの入口にあてがわれ上下にこすられる。かすかな刺激でも達してしまいそうになりながら必死におちんちんに媚びを売る。

「おねがいしますっ！ おちんちんをわたしのっ！ おまんこにつっ！ おねがいしますうっ！」

おまんこをおちんちんにこすり付け、涎をだし、足元に小さな水たまりを作る。届かない以上、入れてもらえるよう懇願するしかないのだ。

「……がつ、はっぁ!」

突然おまんこの奥におちんちんが突き刺さり、一気に絶頂へと持っていくかれる。

「ぐっう……。あぁっ……」

あまりの衝撃に必死にこらえるが、脚が快感でぐくぐくと揺れ、なんとか立っていようと力をこめる。だが、おまんこにも力が入ってしまい、すぐさま二度目の絶頂を迎える。

「さすがに気を失いましたか。とくに媚薬の効果は切れていますが、やはりこの名探偵素質十分ですねえ」

「ふっ、ドクターの調査に間違いはないな……。次でこの名探偵は落ちきる」

気絶しながら痙攣をしているサラをしり目に、次なる調教のステージに取り掛かる男二人がほくそ笑む。

名探偵さん (御影サラ)

- ・基本的にマイペースで行動しがち
- ・助手を忘れて捜査もしばしば
- ・幼少から探偵の才能を発揮し突き進んでいたため、知識はあるが経験がないものも多い(性について)

助手君 (成瀬拓人)

- ・温厚で流されやすい性格
- ・マイペースな名探偵にいつも振り回されてる。
- ・仕事面においては頼れる名探偵を尊敬してる。



キャラ設定

館の主人

- ・事件の主犯
- ・失踪者を調教し金持ち参加のオークションに出している。
- ・紳士口調で話す但内心では人を物ぐらいに思ってる。

・珍しいもの好き

メイドさん

- ・元館を訪れた失踪者
- ・明るいお姉さん

・人を墮とす側の才能を見初められ主人のメイドとして働いている。

お抱え医師

- ・通称ドクター
- ・暗示やカウンセリング専門

・本人にも性欲もあるが相手の変化を見て観察するのが好む

・研究者気質

キャラ設定2

あとがき

たひた荘です。

前回の背徳快発に引き続きオリジナル作品2弾になります。Xで投稿していた名探偵さんシリーズですがC106に伴い作る事が出来て嬉しいです。

日常が侵食されていく過程やギャップなどがMC系作品の魅力のひとつですね。頭脳明晰×暗示は相性が良いように感じました。

名探偵シリーズですがまだ続きそうです、メイドと助手のプレイや名探偵の抵抗などまだ描けてないものがあります故。

前回本よりややページ数増やしや少しコマを割って見たりと試してます。ゆくゆくモノクロ漫画も描きたいですね。

手にとっていただいた方々、並びに支援サイト含め応援してくださる方々の支えで出来た本でもあります。

誠にありがとうございます！励みになっております。

今後ともたひた荘よろしくお願いします。

名探偵は捜査の虜

サークル:たひた荘

発行者:たひた

発行日:2025/8/17/C106

連絡先

メール→tahita2007@gmail.com

各SNSダイレクトメッセージ

印刷：株式会社グラフィック

たひた荘のX(Twitter)
[@bdu9BNSuAY7iLOF](https://twitter.com/bdu9BNSuAY7iLOF)



FANBOX
詳細差分+メモなど



Fantia





名探偵は 捜査の虜

CAPTIVE DETECTIVE

現在
しつけ中♡

メイド

よしっひとまず準備は
こんな所ですね！♡

これから助手さんと
やってきますので♡

ちゃんと失踪者つぼく
振る舞ってくださいね
名探偵さん♡

たろ

スリ

スリ

もぞ

もぞ

助手君…
来ちゃだめだっ

んっ声が…
出ないっ

まあこんなに
ドスケベな

体が開発されてたら
助手さんも
気付きませんか

たら

スリ

スリ

重たい鉄扉を軋ませながら、メイドが先に足を踏み入れる。

助手は後ろから足元の古びた石畳に気をつけながら進む。

「館にこんな場所が隠されてたなんて……」

メイドは一見、不安そうに袖を握る。

そして先を進む……

「あれ……!」

古びた鉄格子の中に、紙袋を被せられ、両手を拘束された人物が吊るされていた

その身体はかすかに震えている、明らかに連れ去られた人間……

「いた……! メイドさん、あれ……!」

その奥の影は身じろぎもせず、ただわずかに肩を震わせていた。

「これは……失踪者の方……でしょうか……!」

メイドが肩を寄せながら、柔らく言う。だがその目だけが、わずかに細められ何かを確かめていた。

格子を開け、助手が慌てて近づく。

紙袋の人物は顔を上げ、声を発そうとするが、口が塞がれていて

「んーっ! んーっ!」というこもった声しか漏れない。

「大丈夫です、今、助けますから!」

焦りながらも優しく語りかける助手。

「大変です……、すぐく震えてる……一体なにがあったんだ……」

助手がそう呟き、紙袋を脱がせようとした時、メイドがその手をそっと止める

「それは、きっと不安で震えているんです……あの、もしかして

——このままでは体温が危ないかもしれせん」

「え……?」

「ほら……見てください。足元、濡れてます。なにかの拷問でも受けたのかも……これでは冷えるのは当たり前です、

これは早く……中から温めてあげないと……♡」

「助手さんのおちんぽで♡」

あくまで心配するフリで、でも導くような口調だった。助手は戸惑いながらも、その言葉に従おうとしていた。

「そんな……わけ……」

ズキンッ……うっなんだ……頭が……ぼーっと……する

「……………」

「いや……あつ……」

「……………」

「でも……」

「……そ、そんなことで……助かるなら……」

「温めてあげないと……」

気付けば助手の目は虚ろになっている

メイドはそっと背中を押した。

「大丈夫です。あなたなら……救えますよ。きっと……この人、待ってたんです♡」

ぐ、と息を呑んだ助手は、そっとズボンに手をかけた。

その指先は微かに震えていたが、その決意は揺らいでいない。

(俺が……助けないと……)

そう信じていた。

「んーっ! んーっ!」

「……大丈夫です」

濡れている膾口を目にし、助手は一瞬戸惑った。

「怖かったですよね……辛かったですよね……でも、もう大丈夫ですから」

「今、あなたを助けます！安心してください！」

名探偵の体がビクリと跳ね、「んーっ!!」と強く首を振る。

その温もりが、自分の心までほぐしていくように感じる。

後ろで、メイドがそっと囁く。

「さあ♡しっかり腰振りしてください♡失踪者を助けられないといけませんよ♡」

静かに、だが確実に、助手の腰が動き始める。

パンツ♡♡♡♡♡♡♡♡

「んーっ……んっ！」という声が、だんだんと揺らいでいく。

代わりに喘ぎにも似たような声が漏れている気がする

（ただ震えは、止まってきた気がする……やつぱり……効いてるんだ）

そう確信しながら、助手は一層優しく、丁寧――

又チュ♡…パンツ♡パンツ♡♡パンツ♡♡♡♡

助手の腰が一定のリズムで動き始める。深く、丁寧に。焦りと使

命感に突き動かされている

「んっ！♡んっ！♡♡♡」

膣内は熱を帯びていた。反射で収縮し、押し返すように助手の器官を締めつける。

紙袋の奥、名探偵の瞳が涙で滲んでいく。顔を強く横に振りながら、必死に否定するも、腰は痙攣を始めていた。

「んっ！んっ♡…んっ♡♡♡」

(ちがう……助手君……気づいて……くれっ！)

(君は暗示に……かかって……るっ……！)

その心とは裏腹に、膺奥は何度も突き上げられ、ねっとりとした粘膜が絡みつき、ずるずると音を立てながら奥を撫で回されていた。

ズポッ♡ズポッ♡パンッ♡又チュ♡パンッ♡パンッ♡

助手の腰は止まらない。

「んっっ♡♡!!んんうっ♡♡♡!!」

名乗ろうとする声は、熱に揺れ、途中で震え、吐息のように溶け

ていへ。

パンツ♡パンツ♡又チュ♡パンツ♡パンツ♡パンツ♡

助手と失踪者らしい人物（名探偵）の行為……

それを見ていたメイドの表情が、ふと変わる。

「なあにやってるんですか？……♡」

次の瞬間、グイッ！と音を立てて、助手の尻の付け根に足を押し踏み込む。

「ほら♡振るの、遅いんですよ♡」

グイッ！ グイッ！ グイッ！

「あっ……うっ……んぐっ……！」

「んーっっ♡！あっ♡んっうっっ♡♡♡」

助手と名探偵の身体が大きく跳ね、全身が揺れる。紙袋越しでも、強く首を振る動きが明確に伝わっていた。

グイ！ グイッ！ グイッ！

「助けるつもりなんですよねえ？♡なら♡ちゃんと腰振りましょうね♡♡」

助手の身体が蹴りの衝撃で前に押し出されるたび、器官がより深く、奥へ奥へと叩きつけられていく。

ズブッ♡パンツ♡パンツ♡ドンッ♡ヌチャッ♡パンツ♡

「んあ、っっ♡♡んっうっっ♡♡♡……！」

膣奥を抉るような突き上げに、名探偵の全身が跳ねた。

助手の顔は真っ赤になり、混濁している

「そっ♡そのまま♡ガンガン♡振って♡♡」

メイドの足は何度も何度も後ろから押しこまれてくる、そのたびに腰が前に弾かれ、名探偵の内側にズドンッ♡と叩き込まれる。

名探偵の涙は紙袋の内では止まらない。膣は反射で締めまり続け、拒絶と絶頂の狭間でビクビクと痙攣していた。

パンツ♡パンツ♡ズブッ♡パンツ♡ヌチャ♡♡♡

名探偵の膣内に何度も突き上げるように入り込むたび、助手の額

から汗が滴る。

だが――。

(……出しちゃいけない……)

その思いが、ぼんやりとした意識の底で、確かに響いていた。

「大丈夫ですよ♡出しちゃっても♡失踪者さんもそれが一番あたたまりますから♡」

背後から囁くメイドの声は、どこまでも優しく、どこまでも誘惑的。

だが、助手の腰は止まらずとも、――射精――という最終的な行為だけは、どこかで踏みとどまっていた。

「まだ……我慢してるんですね……？」

助手の表情は苦しかった。欲望と使命感、暗示と罪悪感がせめぎ合う中で、彼は「出してはいけない」という直感的な抵抗が続いていた。

静かに、しかしどこか呆れたような笑みを浮かべながら、メイドはポケットから薄い青の医療用手袋を取り出した。

ピチン――と指先に空気を通す音が、石壁に響く。

「もう……仕方がないですねえ。そんなに出したくないなら……わたしが、手伝ってあげます♡」

その声色はあくまで優しく、慰めるように響いていた。

助手はその言葉を聞き取る余裕もなく、額から汗を垂らしながら動き続けていた。

「っ……っ、うぐ……あっ……」

名探偵の体内は、すでに何度も奥まで叩かれて、熱く、濡れてい

た。

「それじゃあ、入れますね♡」

メイドはそう囁くと、静かに助手の腰の後ろ——肛門へと手を伸ばした。

潤滑剤のようなものを指先に塗りつけ、迷いなく差し込む。

ぬちゅっ……

「……ああっ?! な、なに……っ!?!」

助手の目が見開かれ、震えた声を漏らす。

だがメイドは構わず、第二関節まで指を押し込み、指先で円を描くようにゆっくり——

「ん〜ここですかね?♡♡ここが前立腺っぽいかな〜♡優しく触ってあげますね♡」

ズズウ……ぐりゅ、ぐりゅっ……

「うっ……ぐ……やっ……やめっ……」

「あっ…♡ここが良いんですね♡」

ぐりゅっ……

反射的に肩をすくめ、腰が跳ねる。

そのたびに、器官は名探偵の膣奥へと押し込まれ、ねっとり音を立てて沈む。

ズブッ♡ズボッ♡パンッ♡ヌチュッ♡

「んんうんぐっ♡うっっ♡♡♡んっ♡♡♡」

名探偵の口からは、再びこもった呻きと喘ぎが混じった声が漏れる。

紙袋の奥で、涙と唾液に濡れた顔が横に振られていた。

助手（ちが……っ……もう……だめだ……!）

名探偵「ん、っっ♡♡♡んあっっっ♡♡♡!」

何かが弾けた。

メイドの指先が、前立腺をちようどよく押し潰すようにぐっと押し込んだ瞬間だった。

ビクンッ!!!

「うう…あゝ…! で、出……っ!」

どぶっ♡びゆるるるるっ♡びゅっ♡♡どびゅっ♡

名探偵の中へ、熱い液体が一気に射精。

奥の奥まで叩きつけられた白濁が、膣壁を満たしていく。

「んっ♡♡♡ううううっ♡♡♡」

紙袋の内側で、名探偵の膣が裏返る。

足先がピンと伸び、体全体が跳ね、膣がビクビクと痙攣しながら助手を搾り取っていた。

「えへへ♡やっぱり♡ちゃんと出るじゃないですか♡」

助手は息を荒げ、膝をついたままそのままのめりに崩れそつになる。

けれど名探偵の体は——さらに強く痙攣を始めていた。

だが——それでも、助手の腰は止まらなかった。

「……え?」

助手自身も、一瞬だけ動きを止めようとした。

しかし——器官はムクッ♡ムクッ♡と再び膨張を始める。

「っ……なんだ……?なんで……また……っ」

荒い息を吐きながら、助手は戸惑いを見せた。

パンツ♡ヌチュ♡パンツ♡パンツ♡ズボツ♡

名探偵の腰が跳ね、全身がビクビクと痙攣を繰り返す。

その様子を、後ろからゆっくりと立ち上がったメイドが見つめる。

まだ助手の尻に指を挿入したままの状態だった。

彼女は、満足そうに微笑むと、そっと囁いた。

「やっぱり……効いてますね。朝の紅茶に混ぜた、興奮剤……♡」

薬の存在を知らない助手は、今や兎情獣のように腰を振り続けている。

目は虚ろになり、理性が溶け出す寸前のような表情。

「助手さんは今射精しても射精しても、止まらなくなるように仕込まれてるんですよ♡」

ぐりつ、と指を再び前立腺に当てると、助手の全身が痙攣する。

「う、あ、づ……！ ま、また……！？」

びゅるっ♡ぴゅっ♡♡びゅびゅっ♡

二度目の射精が、名探偵の奥に叩き込まれる。

名探偵の体が跳ね、紙袋の奥で再び声にならない絶叫を上げた。

「んっ♡♡♡♡♡っ♡んんんっ♡♡♡!」

膾はぎゅうぎゅうに締めながらも、それを拒めない。

助手の器官はビクビクと脈打ち続け、名探偵の奥を押し続ける……

メイドはその様子をじっと見つめ――

「さてと、何回出せるか……楽しみですねえ♡」

「メイドさんの余興」

たひた莊

